

市町村子育て支援機関との連携で重要となること

～外部の専門家の視点から～

稲 場 健

I. 問題と目的

市町村は従来から母子保健と子育て支援の両面から多様な支援の充実に努めてきた（厚生労働省、2017）。平成17年4月からは市町村が子育て支援事業を実施することになり、また、それまで児童相談所が担ってきた児童家庭相談に応じることが市町村の業務として法律上明確化された（厚生労働省、2005）。市町村は、住民にとって「身近な行政」として業務量を増しながら子育て家庭を支えてきたのである。そしてこの流れは現在の子育てを取り巻く状況の中でもさらに重要性を増して続いている。2015年から開始された子ども・子育て支援新制度は、幼児教育・保育・地域の子ども・子育て支援を総合的に推進しようとするもので、市町村が計画を策定し、実施するものである（内閣府、2015）。また、この子ども・子育て支援新制度の支援などを包括的に運営する機能も担い、妊娠初期から子育て期に渡り切れ目のない支援を行う子育て世代包括支援センターが2017年に新たに規定され、市町村における設置が努力義務とされた。この子育て世代包括支援センターでは、各種相談、支援プランの策定、地域の保健医療又は福祉に関する機関との連絡調整などを行い、母子保健施策と、子育て支援施策との一体的な提供を行うものとされている（厚生労働省、2017）。

このように市町村は、地域の第一義的な窓口として子育て家庭を支える重要な役割を担っている。たしかに地域の特性、実情、ニーズに応じた支援は「身近な行政」である市町村であるからこそ可能となると考えられる。しかし、業務量、業務負担は継続して増大していると考えられ、マンパワー不足も課題となっている中、市町村の支援者がいかにして力やその機能を発揮できるかは現実問題として重要なテーマだと考えられる。

筆者は短期大学に所属する臨床心理士（教員）であり、市町村からみれば外部機関に所属する者である。筆者はこれまでの臨床経験における市町村との関わりの中で、日々の業務の忙しさや職員配置、体制の中で奮闘している子育て支援担当者の様子に触れる機会を得てきた。そしてその中でうまく連携がとれない経験をした。どのように連携をとれば、このような現状を抱える市町村の支援者とうまく連携がとれるのか、また、そのとき重要となる関わりはどのようなものなのか。外部の専門家の視点から考えたいとは思いつつも、今まで検討できずにいた。

今回、筆者の所属する短期大学が立地、隣接する2市町と、2市町からみて外部機関に所属する臨床心理士の筆者が子育て支援領域で連携する機会を得た。本稿ではこの連携過程を事例として提示し、事例においてみられていた、外部機関の臨床心理士を2市町が活用していく過程の分析を通して、市町村子育て支援機関と連携していく上で重要となる外部の専門家の関わりについて検討することを目的とする。

Ⅱ. 事例

1. 事例の概要

短期大学の教員である臨床心理士（以下、CPと表記）が2市町（A市、B町）の子育て支援担当課に対して、市町における子育て支援でCPを活用してほしいと依頼したことから始まった連携の事例である。CPからの依頼時には、CPの臨床歴（乳幼児期対象の発達相談に従事していたこと、保育所・幼稚園巡回相談及び絵本を用いた支援を実施してきたことなど）と、1年間の期限で無償で活動することを伝えた。

筆者の所属する短期大学は保育士及び幼稚園教諭を養成する単科大学であり、A市に立地しており、B町とは隣接している。A市、B町共に、豊かな自然に恵まれた市町であるが、他の地方市町村と同様、少子化及び人口減少の問題を抱えている。また、A市、B町共に、子育て支援担当課職員で違う課及び部署の担当を兼務している方もおられるなど、多忙な業務の中で子育て支援を担当している様子がみられる。

2. 倫理的配慮

連携過程の事例の公表と論文化について、A市、B町それぞれの子育て支援担当課の許可を得た。

3. 連携の過程

以下、A市及びB町の子育て支援担当者の発言を「 」、CPの発言を〈 〉、その他の発言を『 』として示す。

0 (X年12月)

CPが所属する短期大学の教員全員が参加する教授会（会議）で、CP活用の依頼を2市町に対して行っていく旨をCPより教員に連絡する。

(1) A市

1 (X + 1年1月)

子育て支援担当課にCPが電話する。〈子育て支援領域でCPを活用してほしいの

ですが>と検討を依頼すると、対応したC栄養士は「前から関わりのある短大のD教員からこの話はすでに聞いていました」と言う。C栄養士は子育て支援担当課長及び関係課に話を通し、CPと会う日時の都合を調整。後日、CPと子育て支援関係職員で会うことが決まる。

2 (X + 1年1月)

A市役所にて話し合う。A市からは子育て支援担当課所属のC栄養士、E保健師、教育委員会所属のF先生の3名が参加された。自己紹介の後、CPからCPの活用の検討依頼とCPの臨床歴を伝えた。E保健師が、「ブックスタートのような支援がやれるといいんですけど」と話す。<A市はやってないんですか>と尋ねると「はい」とE保健師（この後、絵本と子育ての話になり、そこから参加者同士で自分の子育てがどうだったかという話をした）。C栄養士から、CPが支援に出ることのできる量について質問があり、CPから○曜日の午前と伝えた。E保健師からCPが対応可能な支援対象の範囲について質問があり、CPから乳幼児期が対象と伝えた。F先生はA市の学校教育における資源と課題について話した。この後、C栄養士は「本日の内容は関係する課に伝え共有します」と言われ、CPの活用については検討後、CPに連絡するとのことであった。

3 (X + 1年2月)

C栄養士から連絡をもらい、A市役所にて話し合う。A市からはC栄養士、E保健師、G子育て支援担当課長の3名が参加した。C栄養士から「CPには2つの支援をしてほしい」と聞く。一つは絵本の読み聞かせ、もう一つは発達相談であった。支援は子育て支援センターと母子健康センターの2カ所でお願いしたいとこのことを聞く。母子健康センターでは、育児学級(※)に参加している母子が対象とE保健師より。この後、支援の頻度(量)、進行スケジュールについて子育て支援センター分はC栄養士より、母子健康センター分はE保健師よりそれぞれ話がある。CPはこれらA市の提案に承知した旨を伝えると、C栄養士は「3月中に日付を決めましょう。そうすると市の広報に間に合うから」と言う。E保健師は、「外部の人と話すのっていいですね。気分転換、リラックスになるというか」と言う（この後、お互いの家での過ごし方やストレス発散方法について話す）。

※育児学級とは、9～10か月のお子さんをもつ親が集まり、発育、発達等を確認するA市の母子保健事業である。

4 (X + 1 年 3 月)

C 栄養士から連絡をもらい、A 市役所にて話し合う。A 市からは C 栄養士、E 保健師、F 先生の 3 名が参加した（全員が揃うまでの間、A 市及び CP の職場の様子について話す。特に感染防止対応が始まっていた新型コロナウイルス対策の話題が中心であった）。

この日は、CP が関わる支援の日付を決めた。支援の初回は子育て支援センターが 7 月、母子健康センター（育児学級）が 9 月となった。

～この後、X + 1 年 4 月に政府から緊急事態宣言が発出される。A 市の子育て支援関係のイベントの中止だけでなく、子育て支援センター自体も休館となる。# 2～# 4 まで月 1 回の頻度で行われていた A 市役所での会合も X + 1 年 4 月～6 月の 3 ヶ月間はなくなった～

5 (X + 1 年 6 月)

C 栄養士に CP が電話し、現在の子育て支援の A 市の状況について確認する。子育て支援センターは感染防止策を講じた上で少人数の利用にて 6 月から再開館した旨を聞いた。今後、イベントも徐々に実施していく予定であるが、状況により中止があり得ることはアナウンスしていくという。CP の支援も実施予定であるが、同様に中止もあり得ると聞いた。

6 (X + 1 年 7 月)

C 栄養士が日時を調整し、C 栄養士、G 課長同席のもと、子育て支援センタースタッフと CP の顔合わせ会が子育て支援センターで行われた。子育て支援センタースタッフとの自己紹介後、1 番広い部屋でソーシャルディスタンスをとった上で絵本の読み聞かせを実施するなどの感染防止策や進行について共有した。来られるお子さんの年齢層の話をしていた中で、日頃の支援や利用状況について子育て支援センタースタッフが話し、全員で共有した。

7 (X + 1 年 7 月)

C 栄養士より連絡をもらい、A 市役所で話し合う。CP が何うと、C 栄養士、E 保健師、F 先生、G 課長の他、初対面の 2 名の方がいた。A 市図書館の H 次長、I 司書とのことで、CP は挨拶をした。CP はこの 2 名の方の参加を事前に聞いていなかったの、何があるのだろうかと思っていた。「図書館の 2 名に参加してもらったのは、A 市としてブックスタート事業を開始するため」という説明が E 保健師よりあった。今後

A市がブックスタート事業を進めるにあたり、絵本を活用した支援を行ってきたCPに相談したいということであった。すでにブックスタートで配布する手提げかばんのデザインが決まっており、かばんの見本が提示された。「事業立ち上げに向けて準備を進めてきた」とE保健師。今後はパンフレットの作成、配布絵本の選定、ボランティアの募集と育成などをしていくとのことであった。

8 (X + 1年7月)

子育て支援センターにて予定通りCPの支援（絵本の読み聞かせ、相談対応）を実施する。CPが行った絵本の読み聞かせは、C栄養士、E保健師、G課長、A市図書館のH次長、I司書も参観していた。

9～# 10 (X + 1年7月)

8の後、ブックスタートにおける選定絵本の候補や図書館等に置かれる絵本の紹介パンフレットの作成等の件でA市からメールで相談を受け、CPが返信するやりとりを2回行う～

11 (X + 1年8月)

A市役所にて話し合いを行う。A市からの参加はC栄養士、E保健師、A市図書館のH次長、I司書であった。

ブックスタート事業を開始できる準備が、人材、内容面共に整ったとE保健師から話があり、「プレゼントする絵本も決まり、これです！」と教えてもらう。来月の育児学級（母子健康センター）で開始する旨聞く。C栄養士から「支援の計画も立ったことから、この会合は今後、原則開催しないこととしましょう」と提案を受け、CPも承知する。何かあったときにはメール、電話でのやりとりを原則とすることとなった。話し合い終了後に、「ブックスタートが現実化したのはCPがいたことも大きかったかも」とE保健師は言い、<冗談でしょう><最初からやりたいておっしゃってましたよ>とCPは応じた。「10月に子育て世代包括支援センターが立ち上がる。子育て支援再編の流れもありました」とF保健師が言う（この後、職場から家まで〇分かかるといふ話や、夏の夜の家での過ごし方を話す）。

12 (X + 1年9月)

母子健康センターで行われた育児学級にて、ブックスタート事業が開始された。1組1組の親子に対してボランティアスタッフ等が絵本を読み聞かせ、プレゼントしていた。CPもこの場に参加し、相談対応等の支援を行った。

13～# 16 (X + 1年10月～X + 2年2月)

当初の予定通り、子育て支援センター及び母子健康センター（育児学級・ブックスタート事業）での支援をCPは計4回行った。

17 (X + 2年2月)

A市役所にて、今までの振り返りの話し合いを行う。A市からはC栄養士、E保健師、G課長が参加した。「ブックスタートでは図書館との連携が起きました。ボランティアの募集など、地域に対しても連携が広がった印象がある」とE保健師。「ブックスタート開始後、育児学級の受診率が上がったんです！本がもらえるというのもあったと思うけど」とE保健師は笑顔。<ブックスタートがこのように実施できたのはどうしてだと思いますか？>と尋ねると、「チームワークが良かったですね」とE保健師。「本当、よくしゃべったよな」とG課長。「G課長がやりたいことの背中を押してくれた」とC栄養士。「CPの専門性の後ろ盾も大きかった。専門的な視点で支えてくれる後押しがあったからできた面がある」とE保健師。「ブックスタートはただ本を配って終わり、の事業じゃないと思う。CPがいたことで、この事業はバックグラウンドの価値をもてたことが大きい。それは発達支援だったり、そういうことが大事。つながりができた」とG課長。最後に「ブックスタートでは思うような支援ができて良かったです」とE保健師は語った。

(2) B町

1 (X + 1年1月)

短大のJ教員から『今日B町の職員と会うので、よければ紹介するよ』と言ってもらい、その後紹介してもらい、元々J教員が担当している件でB町の職員と短大内で会う予定だったとのことで、その場に同席させてもらい、初対面の挨拶をB町の職員と行う。このとき会ったB町の職員がB町の子育て支援担当課につないでくれて、子育て支援担当課職員と後日会うことが決まる。

2 (X + 1年1月)

B町役場にて話し合う。B町からは子育て支援担当課所属のK保健師、L保健師、M係長の3名が参加した。自己紹介の後、CPからCPの活用の検討依頼とCPの臨床歴を伝えた。

M係長から、CPが支援に出ることのできる量について質問があり、CPから○曜日の午前と伝えた。K保健師はB町の幼稚園、幼稚園に相談ニーズがあること、特に年中児の発達相談の必要性を語った。「B町には園の巡回相談や年中児への発達相

談の事業はないので」と K 保健師。L 保健師は B 町の療育支援について話し、M 係長は B 町の子育て支援体制の現状を語った。CP の活用については検討し、活用するようなら CP に連絡すると聞いた。

3 (X + 1 年 3 月下旬)

B 町から連絡がなかったが年度が変わる異動の時期であり、その確認のため、M 係長に CP より電話する。M 係長より「私は他課へ異動します。保健師の異動はありません」と聞く。町の公共施設は現在休館中（新型コロナウイルス感染防止対応）とのこと。M 係長より「(CP の活用に関する) この件は次年度担当に引き継ぎますので」と言われ、<承知しました>と CP は答えた。

～ X + 1 年 4 月、政府から緊急事態宣言が発出される～

4 (X + 1 年 6 月)

B 町から CP の活用に関する連絡がないまま約 5 ヶ月間が経過した。職員の異動を確認する連絡のみ CP から B 町に行った（# 3）が、この他はあえて CP から連絡をとらず待ってきた。すると、K 保健師から電話が入った。「年中児発達相談会の実施を考えています。CP には町の園を巡回してもらい相談にのってほしい。計画を立てたので意見を聞かせてほしい」と言う。CP は<わかりました>と応じた。CP は B 町がこの間に、年中児発達相談会実施へ向けて計画を立てて動いていたことを知った。

5 (X + 1 年 6 月)

短大で K 保健師と話し合う。K 保健師が持参された年中児発達相談会の計画案を共有しながら、相談会の目的を中心に意見交換をした。“相談のしやすさ” “悩みを抱え込まない” “つながる” ことを重視したいと K 保健師は言う。<では、この重視のポイントに沿って考えていくことになりますかね>と CP が言うと、「そうですね」と K 保健師。年中児の全家庭に相談会の案内を出すのが、強制ではなく、相談希望者を対象としたいとのこと、相談には保健師、園の担任の先生、CP が同席し、皆で支援していきたいことなども合わせて K 保健師より聞く。このとき、10 月の実施に向けての準備スケジュールや園や家庭に配布する書類案もすでに作成されており、ここまでかなりの時間をかけて準備していたことが CP には感じられた。これらの書類関係については後日、電話で意見交換することとなった。

6 (X + 1年7月)

K 保健師と電話で話し合う。前回、CP と話した後、B 町の園にも意見を伺い、相談会の名称を年中子育て相談会に変えたと聞く。「その方が相談しやすい」と K 保健師。前回共有した重視ポイントに基づき、相談会の日程や支援内容、家庭への案内などを、今後電話、メールの手段で細部に渡り点検していくことになった。

7～# 12 (X + 1年7月～9月)

相談会計画の点検について、3ヶ月間で6回、電話及びメールのやりとりを K 保健師と行う。特に、家庭への案内、相談を希望する人に提出してもらう調査票等については、修正を繰り返すやりとりを K 保健師との間で4ターン行った。

13 (X + 1年9月)

短大で K 保健師と話し合う。10月から始まる相談会の日時と内容についての最終確認を行った。相談会には、幼稚園、幼児園の先生も出席するので、保護者の都合のほか、園の日課とも連動させる形で保育者が同席しやすいよう調整したとのこと聞く。CP は相談会に向けて短大に、園に連絡調整して動いている K 保健師の様子を知った。

14 (X + 1年10月上旬)

幼児園に CP が訪問し、K 保健師、L 保健師同席のもと、園長及び園の担当の N 先生に挨拶をする。園の見学もさせてもらう。

15 (X + 1年10月下旬)

第1回目の年中子育て相談会が幼児園で実施された。

16～# 19 (X + 1年11月～X + 2年1月)

その後も当初の予定通り、年中子育て相談会が4回行われ、CP も参加した。

20 (X + 2年2月)

B 町役場にて今までの振り返りの話し合いを行う。B 町からは K 保健師、L 保健師が参加した。「就学に向けては、年長より早い時期の支援が町の課題でした」と K 保健師が言うと、L 保健師も「そうですよね」と頷く。

「今回の相談会には、思っていたよりも多くの保護者が参加してくれました」と L 保健師。「実施できてよかった。でも、保護者の待機時間や園の日課との連動など課題もある」と K 保健師。課題については今後検討していくこととなった。<今年度、

相談会が実施できたのはどうしてだと思いますか？>と尋ねると、「元々、年中児への支援の必要性を感じていた。そこにCPが来てタイミングが合った」とK保健師。<タイミングが合った？>「専門性が欲しかった」とK保健師。「町の職員で臨床心理士はいないので、発達の相談など専門性で支えてくれた」とL保健師。

Ⅲ. 考 察

1. 市町村の主体的な動きと外部の専門家の活用

今までになかった新しい事業を立ち上げるというのは、2市町の主体的な動きである。A市ではブックスタート事業、B町では年中児子育て相談会が新規事業としてスタートした。そして、2市町共に、新規事業の中でCPの臨床歴を生かした活用が起きていた。A市のブックスタート事業には、CPの絵本を用いた支援が、B町の年中児子育て相談会には、CPの保育所・幼稚園巡回相談がそれぞれCPの臨床歴として符合する。CPの臨床歴はCPが今まで実践してきた援助内容であるので、CPのidentityとも言え、CPの主体性が表れているものと考えられる。つまり2市町は、CPの臨床歴を活用した点において、CPの主体性を生かしていたとすることができただろう。このように、2市町は、新規事業の立ち上げという自らの主体的な動きの中で、CPの主体性を生かした活用を行っていたと考えられる。2市町と外部の専門家であるCPとの間で双方の主体性が発揮される連携が起きていたことがこの事例から考察される。

それでは、この連携が起きた過程では、どのような関わりが重要であったのだろうか。市町村子育て支援機関と連携していく際に重要となる外部の専門家の関わりについて、以下に検討していく。

2. いかに出会うか

2市町共に、CPは#2で子育て支援担当者と“出会い”の機会を得ていた。外部のCP1名に対し、A市、B町共に3名の子育て支援担当者が会っていた。連携の入り口である出会いにおいて、このような複数の担当者を知り合える機会を早々に得ることができたのは、その後の連携に大きくプラスになることであったと推察される。どのようなことがありこの出会いにつながったのか、以下に考察する。

第一に、外部のCPが所属する組織内での連携があったことが挙げられる。A市、B町共に、CPと最初に出会う日時が#1で決まっているが、A市は「D教員からこの話はすでに聞いていました」とあり、B町ではJ教員がCPをB町職員に紹介した経過がみられていた。このようにCPが2市町に関わる前にCPの同僚がすでにCPを2市町につなぐ方向に動いていたことがうかがえる。#2で外部の専門家として会ったのはCPだけであるが、会っていないCPの同僚の“つなぐ動き”も連携の経過では含まれていたのである。

この点において、子育て支援担当者とは会っていないCPの同僚も外部の人間として連携に加わっていたといえる。外部の専門家個人が市町村と関わる時、とかく外部の個人で連携していると考えがちであるが、本事例のように外部の専門家が所属する組織の構成員が連携に貢献することもある。この意味においては、外部の専門家にとって、自身の組織全体で市町村と連携するという視点が重要となると考えられた。そしてそのためにはまず、市町村と関わる情報を外部の専門家の組織内で共有することが必要となる。#0でCPが同僚の教員に2市町村に対して行っていく内容を連絡しているが、この情報を元として、A市にはD教員が、B町にはJ教員がCPを2市町村に“つなぐ”役割を果たしたと考えられる。市町村と関わる外部の専門家にとって、まず自身の組織内で情報を共有するという内部の連携が、市町村との連携をスタートさせる“出会い”につながるものとして重要だと考えられた。

第二に、外部のCPの立場が生かされた面やCPの所属先と2市町村の関係性があったことが挙げられる。まず“短期大学教員”というCPの立場は専門性をもった人材として市町村に捉えられやすかった面が推測される。「専門性が欲しかった(B町、#20)」との求めがある中で、専門性をもつ人材と捉えやすかったCPの立場が出会いに生かされたのだと考える。また、CPが所属する短期大学と2市町村は立地、隣接地域であり、関わりがすでにもたれていた関係であった。A市の#1では短大のD教員のことを「前から関わりのある」とC栄養士が形容し、B町の#1では、短大のJ教員が担当している件でB町の職員と短大内で会うことが起きている。このような関係がすでにあったことが複数の担当者とは早々に出会えたことにつながったと推察される。以上から外部の専門家にとっては、自分の立場が出会いに生かされる可能性や、出会う前における自身の所属と市町村との関係性に留意することも連携のスタートにおいて踏まえているとよいと考える。

3. 市町村独自の特徴を捉え、応じていくこと

A市とB町で連携のスタイルが違っていた。A市は複数の担当者が参加する会合が定期的開催されるスタイル(#2、#3、#4、#6、#7、#11、#17)であり、B町は#2から連絡がない状態が5か月間続くが(#4まで)、CPの活用決定後は、必要時に集中して担当者1名と話し合うスタイル(#5～#13)であった。このスタイルの違いは、2市町村の動き方、進め方の違いとして、連携面における2市町村の特徴が表れているものと考えられる。新規事業開始に至る過程では、CPがA市、B町の違うスタイルに応じながらそれぞれ連携をとってきたことが事例からうかがえる。A市は「子育て支援センター分はC栄養士より、母子健康センター分はE保健師より(#3)」とあった通り、子育て支援と母子保健で役割を分担して動いていたので、複数人が定期的に会うスタイルの方が支援内容を共有しやすかったと考えられる。B町は相談会の計画を進めて

いたK保健師1名とのやりとり（#5～#13）が進めやすかったのではないかと推察される。市町村においては、行政規模や内部組織の違いなどから、動き方、進め方に違いがあることも考えられ、関わる外部の専門家は、市町村の連携スタイルをその市町村独自の特徴と捉え、そのスタイルに応じていくことが重要だと考えられる。

また、検討のスタイルもA市、B町で違いが見られた。CPの活用に関して、A市は依頼から1か月後の#3ですでに「2つの支援をしてほしい」とC栄養士が言っているが、B町は5か月間連絡がなかった後の#4で「町の園を巡回してもらい相談にのってほしい」とK保健師から電話が入っている。このようにCPの活用が顕在化するまでの時間についてもA市、B町で4か月の違いがあった。この違いに対し、CPは2市町それぞれの検討後、つまりCPの活用内容が告げられてから、<承知した(わかりました)>と応じている。このときに起きていたことを考察してみたい。

外部のCPにとっては、話し合った内容などの顕在化した情報からでしか市町村の動きを知ることができない。A市はCPの活用を依頼から1か月という早さで表明したので、CPの活用に関するA市の動きは外部のCPにとって早くに顕在化し、わかる状況になった。つまり、A市の動きが「見えた」ので、その動きに応じやすい状況が生まれたと考えられる。反面、B町からは5か月間連絡がないという、外部のCPにとって動きが「見えない」状況であった。動きが「見えない」ので、どのように市町村に関わればよいか難しい状況が生まれていたと考えられる。この間のCPのB町への関わりは、異動の確認（#3）はするも、CPの活用については「あえてCPから連絡をとらず待ってきた（#4）」というものであった。このCPの関わりはB町にとってはどのようなものであったのだろうか。

このCPの態度は、B町（子育て支援担当職員）に関心を持ちつつ、独自性をもって動いているB町を想定している姿勢を表しているように捉えられる。「あえてCPから連絡をとらず待ってきた（#4）」間にB町は「年中児発達相談会実施へ向けて計画を立てて動いていた（#4）」のであり、「書類案もすでに作成されており、ここまでかなりの時間をかけて準備していた（#5）」ことをCPは感じている。さらにB町はこの主体的な動きのほか、時期としては緊急事態宣言の対応にも注力していた中と推測される。市町村は外部からみて連絡がない「見えない」間でも、独自性をもって動いているという想定が外部の専門家にとって求められるのではないだろうか。その上で、市町村の検討のあり方に時間的な違いがみられても、この違いも市町村独自の特徴と捉え、そのあり方に応じていく姿勢が重要だと考えられる。

この「見えない」間の行政の主体的な動きはA市でもみられた。「(ブックスタート)事業立ち上げに向けて準備を進めてきた（#7）」というA市の主体的な動きは、外部のCPにとって#7で「見える」こととなる。B町と同様に、「見えない」間も独自性をもつ

て動いている A 市の想定をすることで、A 市図書館の H 次長、I 司書の話し合いへの参加（# 7）という CP が事前に聞いていなかった A 市の自発的な動きに気づきやすくなるなど、A 市独自の特徴を捉えた関わりにも繋がっていくと考えられる。

4. 「外部性」を生かすこと

CP の活用をこの連携事例の本論とした場合に、本論の話に付随して起きていたことに着目してみたい。

第一に、雑談である。以下に挙げると、A 市の「この後、絵本と子育ての話になり、そこから参加者同士で自分の子育てがどうだったかという話をした（# 2）」「この後、お互いの家での過ごし方やストレス発散方法について話す（# 3）」「全員が揃うまでの間、A 市及び CP の職場の様子について話す（# 4）」「この後、職場から家まで〇分かかるといいう話や、夏の夜の家での過ごし方を話す（# 11）」である。外部の CP と A 市との間でこのような本論とずれる雑談のやりとりが新規事業開始に至る連携過程でみられていた。この雑談が A 市との連携にどのように関係したかの詳細は不明であるが、「外部の人と話すのっていいですね。気分転換、リラックスになるというか（# 3）」という E 保健師の発言からは、日頃の内部の同僚とは違う外部という属性をもった人との話が気分転換、リラックスにつながっていいという意味が捉えられる。また、雑談とはインフォーマルな会話であるので、形式ばっていない自由な点で気分転換やリラックスにつながった可能性も考えられる。これらから考察すると、外部の人間である CP とのインフォーマルな会話である雑談は、対外機関同士のフォーマルな関係である A 市との連携において、いい意味での気分転換やリラックスをもたらした可能性が示唆された。外部との連携における雑談の意味に関して、吉澤・古橋（2009）は中学校教師に対して行ったスクールカウンセラーに関する調査から、「SC（スクールカウンセラー）との雑談が行われている教師の方が SC との連携につながっていく傾向がみられた」ことを報告している。この調査は市町村ではなく、福岡県内の公立中学校の教師を対象に行われたものであるが、スクールカウンセラーという外部の専門家との連携を検討しているという点で本稿との類似性もあり、機関こそ違っても連携における外部との間でもたれる雑談の重要性を示している点では参考となる知見と考えられる。しかし、今回の考察では、あくまで外部との間でもたれる雑談が A 市との連携においてプラスに作用する可能性が示唆されたということであり、その有用性については更なる検討が必要と考える。

第二に、支援体制、地域資源、日頃の支援の状況についての語りが本論の話に付随して起きていた。A 市においては「F 先生は A 市の学校教育における資源と課題について話した（# 2）」「日頃の支援や利用状況について子育て支援センタースタッフが話し（# 6）」、B 町においては、「B 町には園の巡回相談や年中児への発達相談の事業はないので（# 2）」

「L 保健師は B 町の療育支援について話し（# 2）」「M 係長は B 町の子育て支援体制の現状を語った（# 2）」「就学に向けては、年長より早い時期の支援が町の課題でした（# 20）」である。2 市町が体制、資源、支援の状況について話すことは CP の活用という本論の話に関係することなので、付随して起こることは想定されよう。しかし、ここで着目したいのは、外部の人間との間でこのことが起こる意味についてである。外部の人間に自身の市町村の体制、資源、支援の状況を話すとき、行政側からみれば、外部の人間にこの話を聞いてもらうということが生じる。この、自身の市町村の状況を語り、聞いてもらうという行為自体が、日頃多忙な業務を抱える行政内部では起きにくいと考えられ、この点において希少な機会としての意味をもつのではないだろうか。また、外部の人間に自身の状況を語ることは、現状を整理し、言語化する作業となる。この行為自体が、日頃の実践の振り返りや再確認の意味をもつとも考えられる。外部の CP との間でこの語りが起きていたことは、市町村からみれば、今後の支援に向かう上での、現状の振り返りと再確認の機会となったことが考えられた。

以上の 2 点のように、外部の専門家のもつ「外部性」が市町村と連携していく上で、有効に機能する可能性が示唆された。

5. 専門性の“後ろ盾”～専門性で支えるということ～

外部の CP との最初の出会い時に、「ブックスタートのような支援がやれるといい（# 2）」と A 市の E 保健師は語り、B 町の K 保健師は「年中児の発達相談の必要性（# 2）」を話されている。やれるといい、または必要だと最初に語っていたわけであるから、これらの事業が 2 市町においてそれぞれ実施できたことに何ら不思議はないのかもしれない。しかし、今まで 2 市町でこれらの事業が実施できていなかったことを踏まえると、やれるといいと思っても、必要だと思っても実現できないこともあると考えられる。A 市の # 11 で E 保健師は「ブックスタートが現実化したのは CP がいたことも大きかったかも」と語っているが、この語りにおける”現実化“という言葉の使用は、逆説的であるが、”現実化“しない場合の想定もあったことを含んでいる意味として捉えられる。市町村が行う子育て支援において、やれるといい、必要だと思うだけでなく、実際に実施ができるためにはどのようなことが重要となるのであろうか。このことがわかれば、市町村がその力や機能をより発揮する方向に役立てられると考える。財源（予算）の問題や市町村内における実情などさまざまなことが関係していると推測されるが、本稿の目的である外部の専門家の関わりとしておさえておくことやできることに着目して考えてみたい。

A 市、B 町それぞれに対して、最後の回の振り返りで CP はブックスタート、相談会が実施できたのはどうしてだと思いますかと尋ねている（A 市は # 17、B 町は # 20）。この質問に対して、2 市町がまず最初に答えていた内容は、A 市が「チームワークが良かつ

たです(E 保健師)」「本当、よくしゃべったよな (G 課長)」「 G 課長がやりたいことの背中を押してくれた (C 栄養士)」であり、 B 町は「元々、年中児への支援の必要性を感じていた (K 保健師)」であった。これら担当者の発言からは、 A 市においてはやりたいことの背中を押してくれる上司の存在やチームワークが、また B 町においては支援の必要性を感じていたという動機づけがそれぞれの新規事業を実施できた理由として最初に捉えられたことといえる。このことから、第一義的にはチームワークや動機づけといった行政内部の理由が新規事業の立ち上げと実施という 2 市町の主体的な動きにつながったのだと考えられる。

そして次に、それらに続く回答として 2 市町が答えていたのが CP の専門性についてであった。 A 市は「 CP の専門性の後ろ盾も大きかった。専門的な視点で支えてくれる後押しがあったからできた面がある (E 保健師)」「 CP がいたことで、この事業はバックグラウンドの価値をもてたことが大きい。それは発達支援だったり、そういうことが大事 (G 課長)」、 B 町は「専門性が欲しかった (K 保健師)」「町の職員で臨床心理士はいないので、発達の相談など専門性で支えてくれた (L 保健師)」と答えていた。これらの発言からは、外部の専門家としての CP の専門性が“後ろ盾”として、 2 市町における新規事業実施を支えていたとの当事者の捉えがうかがえる。外部の専門家がその専門性で支えるということは至極当然のこととも考えられるが、今回このことが市町村当事者の捉えから確認された点において、本質的に重要な意味をもつと考えられる。

また、この専門性が“どのように”支えたのかということについては、 A 市の E 保健師は「後ろ盾」「後押し」、 G 課長は「バックグラウンドの価値」と言っている。これらの発言から、専門性は“後ろ”“後”“バック”で支えるという機能を果たしたと捉えられる。先述の通り、新規事業が実施できた理由として、 2 市町は第一義的には行政内部の理由を挙げていた。その行政内部の動きを“後ろ盾”“後押し”といった後ろから支えるものとして、外部の専門家のもつ専門性が生かされたということだと考えられた。

市町村との連携においては、外部の専門家のもつ専門性が、行政内部の主体的な動きを後ろから支えるという機能で生かされることがある。このことを踏まえながら、専門性を生かした連携を行っていくことが重要だと考えられた。

<付記>

本稿の主旨にご賛同いただき、ご協力いただきました A 市、 B 町の子育て支援担当課職員の皆様、子育て支援関係課職員の皆様に感謝いたします。本研究は新潟中央短期大学プロジェクト研究推進費の補助を受けましたことを報告いたします。

文 献

厚生労働省（2005）：市町村児童家庭相談援助指針について、
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv11/03-01.html>（2021年2月25日取得）

厚生労働省（2017）：子育て世代包括支援センターガイドライン、
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kosodatesedaigaidorain.pdf>（2021年2月25日取得）

内閣府子ども・子育て本部（2015）：子ども・子育て支援新制度について、
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/meeting/ko_domo_kosodate/k_24/pdf/s5.pdf
（2021年2月25日取得）

吉澤佳代子・古橋啓介（2009）：中学校におけるスクールカウンセラーの活動に対する教師の評価、『福岡県立大学人間社会学部紀要』17（2）、47-65